

防災×スポーツ

カケル

フォローアップ研究

未曾有の大災害に見舞われ、市民の防災意識は高まりつつも、地域の防災組織の人手不足は深刻である。地域の防災現場に、スポーツコミュニティが加わることで、新たな自助・共助の道が拓けるのではないか…

Disaster Resilience x Sports



はじめに

災害発生頻度の高まりとともに、公的機関による支援、特に発災直後の支援の限界が明らかになりつつあり、自助・共助の重要性が唱えられるようになった。共助では、近隣住民との日頃からのコミュニケーションやお互いの存在自体の認識が大切であるとされ、各地域で自主防災組織が主体となり防災活動が行われているが、自主防災組織の母体である自治会等の高齢化や人手不足および地域のつながりの希薄化が課題となっている。

一方で、「人生 100 年時代」へ向けた健康寿命の延伸方法の一つとしてスポーツの実施への関心が高まり、成人のスポーツ実施率は増加していることがスポーツ庁の報告¹で明らかにされている。体力的な備えを持つスポーツ実施者が、スポーツを通じて他者とコミュニケーションを図るように、近隣住民とコミュニケーションを取り、災害に関する知識を備える努力をすることで、災害発生時に大きな力を発揮できるのではないかと、また、そのような人が地域に増えることで地域の防災力が向上するのではないかと考え、我々は、2018 年度より防災とスポーツを組み合わせる研究に取り組んできた。

今年度はスポーツコミュニティが地域の防災に寄与できる可能性があるという仮説を基に、地域での実践に取り組んでいる。特に、この活動が地域で展開していくための課題を探るという点に着目した。

防災とスポーツを組み合わせる試みに関心をもってくれる方は多いものの、その実施（ワークショップ）に関しては、参加者を集めることの困難さを指摘する方が多かった。外出の機会が少なくなった高齢者や、地域との関係性が薄くなりつつある若者、そして地域との繋がり方が分からない外国人在住者の存在が明らかになり、いかに彼らの参加を促すかが課題の一つであることが分かった。

今後、多種多様な余暇の使い方におけるスポーツへの関心の高まりを利用し、スポーツと組み合わせた防災活動やスポーツコミュニティへの防災活動の取り込みが浸透し、ひいては地域防災力の向上が高まることを願っている。

¹ スポーツ庁「平成 30 年度スポーツの実施状況等に関する世論調査」https://www.mext.go.jp/sports/content/1413747_001_1.pdf

目次

はじめに.....	1
目的.....	5
1. 「防災×スポーツ」概念の整理.....	6
2. 「防災×スポーツ」アクティビティメニューの検討.....	9
3. 令和元年度箕子防災訓練「防災×スポーツ」ワークショップ.....	12
4. 実践における課題と今後の展開.....	19

目的

本研究は、昨年度取り組んだ地域のスポーツコミュニティを防災に生かす調査研究の深化を図るために行ったフォローアップ研究である。昨年度は、まずスポーツコミュニティが防災に寄与する可能性の理論的検証を行い、次に地域の自主防災活動の実態と課題に対するスポーツコミュニティの役割を明らかにするとともに、地域の自主防災組織との連携活発化を意識したワークショップを企画、開催した。今年度は、聞き取り調査や地域防災訓練でのワークショップ開催など、地域での実践を通して、水平展開していくための課題を洗い出すことを主眼に置いた。

本研究の活動項目は、昨年度の調査研究を経て生まれた「防災×スポーツ」という概念の整理、地域コミュニティ関係者らへの聞き取り調査と並行して取り組んだ「防災×スポーツ」アクティビティメニューの検討、および地域防災訓練の一環として実施した「防災×スポーツ」ワークショップなどとなる。

1. 「防災×スポーツ」概念の整理

(1) 「防災×スポーツ」概念の整理

まず、本研究のテーマである「防災×スポーツ」の概念を整理した上で図式化する。

スポーツは、人のつながり等を示すソーシャル・キャピタル²の構築に影響を与えることから、スポーツコミュニティ（スポーツをする人の集まり）が、国の防災教育のねらいとして挙げられている「備え」「つながり」「知識」にいかに関与しうるかを検討した。その結果、スポーツコミュニティが、「判断力・行動力」、「集団意識」、「他者配慮の精神」、「コミュニケーション」の4つの特性において、災害時に力を発揮することが認められた。こうした特性は、災害の備えあるいは防災活動の基礎として働きうると考えられる。福岡市内には、自治会・町内会が2,300存在し、これに対し、スポーツコミュニティは約2,000団体存在する。一方、地域の防災主体である自主防災組織の組織率は100%で、市内の各校区に自主防災組織が存在するが、その母体となる自治会等の高齢化や若者と地域の関係の希薄化による担い手不足も影響し、地域の防災力はまちまちである。災害直後は特に、行政や消防がより緊急を要する救命救急活動に携わる必要から、公助に依存できない現実に対し、地域では、高齢化や人手不足により地域防災体制が十分に整えられているとは言い難い。

また、関係者への聞き取りから、発災時の1) 避難所の運営補佐、2) 避難時の救援・救護、3) 指定外避難所支援の3点において課題が認められたことから、それぞれにおけるスポーツコミュニティに期待できる役割を整理し、さらに、それらの役割を、災害マネジメントサイクルの考えから「クライシスマネジメント」期（発災直後から復旧・復興まで）と「リスクマネジメント」期（減災および事前準備）に分け、それぞれの期における活動を次の通りに整理した。

1) 避難所の運営補佐においては、クライシスマネジメント（CM）として、避難所の設営・運営に加え、物資の配給支援、さらには被災者の健康維持のためのアクティビティの企画運営等、リスクマネジメント（RM）として、スポーツ活動の場における防災資材等の確認等。

2) 避難時の救援・救護においては、CMとして被災者の地域の避難所への誘導と、RMとして要配慮者（要援護者）の確認と避難経路の確認。

3) 指定外避難所支援においては、CMとして個別の事情により指定避難所を利用できない人々に対する物資の調達、RMとして指定外避難所の状況把握を可能にするアプリを活用した事前準備。

このように、有事を想定した上で平時に必要な取り組みを検討し、スポーツ活動の一環として段階的に防災活動を実施することでスポーツコミュニティの能力を高められることを指摘し、このようなスポーツコミュニティが各地域で増えていくことで、地域防災力の向上を目指

² 「信頼」「社会規範」「ネットワーク」といった人々の協調行動の活発化により、社会の効率性を高めることができる社会組織に特徴的な資本を意味し、従来のフィジカル・キャピタル（物的資本）、ヒューマン・キャピタル（人的資本）などとならぶ新しい概念。（出典：「地域保健対策検討会報告書（平成24年3月27日）」（厚生労働省））

すことができるという構想をまとめた。これにより、地域コミュニティ振興に関わる方たちへ「防災×スポーツ」の概念を説明し、実際の地域で展開していく方法を探った。

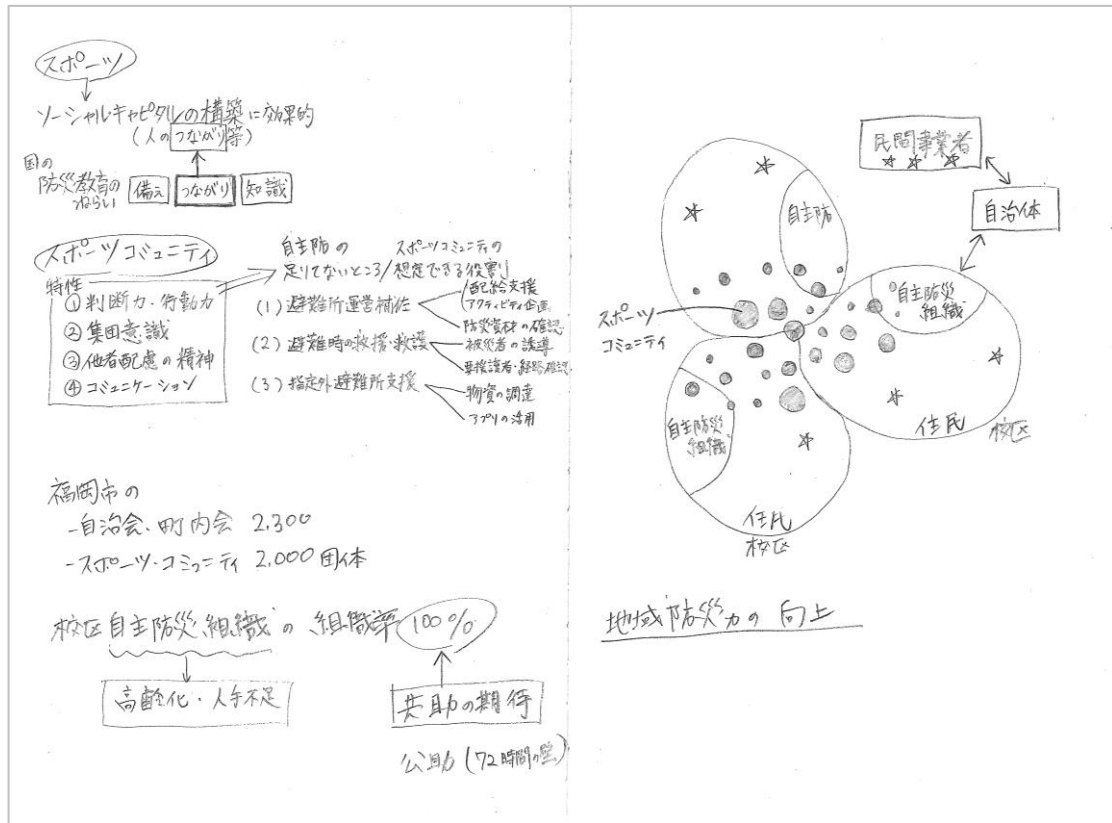


図1 昨年度研究内容及び「防災×スポーツ」の要点をまとめた画

(2) 地域との関係性

スポーツコミュニティでは、日常的なスポーツ活動を通して災害時に役に立つ4つの特性を培うことができる。そのため、防災知識を浸透させることで、災害時の諸活動の担い手、つまり自主防災組織の補佐的役割を担うことが期待できる(図2上)。この観点から、地域における防災活動と災害時に役立つ4つの特性を身につける方策として、地域住民が「防災×スポーツ」の要素を持ったワークショップへ参加することで、防災意識を高め、4特性を身につけることが期待できるのではないかと考えた(図2下)。

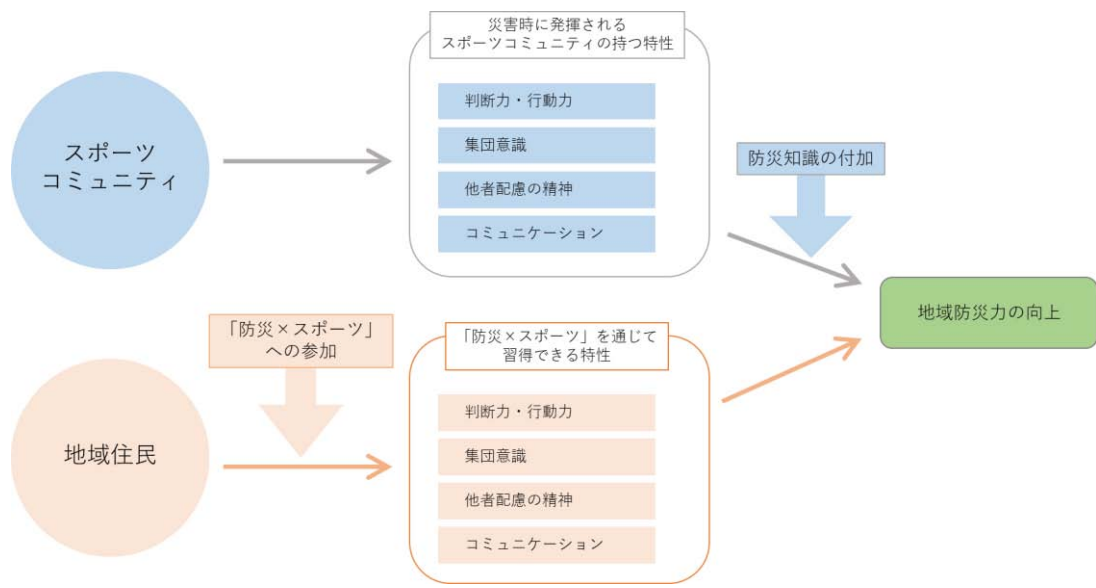


図 2 「防災×スポーツ」概念図

2. 「防災×スポーツ」アクティビティメニューの検討



災害時に役立つスポーツコミュニティの4つの特性、「判断力・行動力」、「集団意識」、「他者配慮の精神」、「コミュニケーション」を、体を動かしながら習得できることを目指す「防災×スポーツ」のアクティビティメニュー（活動内容）の検討を行った。

昨年度、福岡市内のサッカークラブの子ども達を対象に実施した「防災×スポーツ」ワークショップで行ったアクティビティ（運動）は、「バランス&ステップ」、「音ゲーム」、「防災ゲーム」、「鬼ごっこ」、「試合形式」である。それぞれのアクティビティの防災要素を一覧で整理し、スポーツコミュニティの4つの特性のうちどの特性を得ることができるか、またどのような理由でその特性を得ることができるかを示した（表1）。

アクティビティメニューは、ワークショップでの実施だけでなく、既存のスポーツコミュニティが、スポーツ活動の一環である準備運動として実施することも可能である。例えば、「音ゲーム」は、笛の音の数と同じ人数が集まって座るというアクティビティである。音に反応して瞬時に周囲の状況を見ながら行動する「判断力・行動力」や、人数がそろっているかを集まった人たちで確認する「コミュニケーション」などの能力を備えることが期待される。

また、対象年齢や、実施に必要な時間、人数、スペース、アイテムなどの条件に応じて、ワークショップの規模や参加者に合ったアクティビティメニューもあわせて検討した。

表 1 運動別防災要素一覧

運動	内容	判断力・行動力	集団意識	他者配慮	コミュニケーション
バランス&ステップ 	指導者の動きや姿勢を真似ながら、バランストレーニング、ステップトレーニング、ボールを使ったコーディネーショントレーニング ³ を行う	動きや姿勢を目で確認しながら、自分の体をコントロールする	同じ動きをしようとチャレンジする仲間意識	周囲の人にぶつからないように意識する	
音ゲーム 	笛の音が聞こえたら、その音の数と同じ人数と一緒に座る	笛の音の数に応じて瞬時に対応を判断する	人数がそろったらなるべく早く一緒に座るという共通認識	笛の音を聞くと同時に周囲の状況を見極める	一緒に座る人数が笛の音の数と同じか確認し合う

³ 旧東ドイツにおいてトップアスリート育成のために1970年代から研究・開発されている、主に神経系に視点を置いたトレーニング方法。具体的には7つに分類された能力（リズム能力、連結能力、変換能力、反応能力、分化能力、バランス能力、定位能力）に視点を置き、それらを総合的に向上させるために行われる。（出典：平井博史，笠原愛：小学校の体育の授業にコーディネーショントレーニングを取り入れて体力・運動能力測定値を向上させる方法の研究-三重県いなべ市における実践-，中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究第1巻(2016)，pp.181-188, 2016-3)

<p>防災ゲーム</p> 	<p>指導者が発する災害を想定した言葉に合わせて行動をとる。言葉が「火事」であれば口を手でふさぎ、「地震」であれば頭を抱えて座る</p>	<p>聞こえた言葉に瞬時に反応し、行動する</p>		<p>周囲の人にぶつからないように意識する</p>	
<p>鬼ごっこ</p>  	<p>①決められた人数で手をつないでいる時は鬼に捕まらない「手つなぎ鬼ごっこ」 ②枠内に複数個ボールを入れ、それを持っている人は捕まらない「ボール鬼ごっこ」</p>	<p>決められた人数に応じ、手をつなぐかどうかを判断する</p>	<p>鬼に捕まらないために共に協力する</p>	<p>逃げる仲間を助けるための行動を考える</p>	<p>ボール保持者がボールを持たない仲間を助けるために声掛けを行う</p>
<p>試合形式</p> 	<p>2つのチームに分かれてサッカーの試合を行う</p>	<p>刻々と変化する状況下でどのようにプレーするかを判断する</p>	<p>得点に向けて協力しながらパスを回しゴールへ近づく</p>	<p>ボールに触れていない仲間への配慮</p>	<p>状況に合わせて声掛けを行う</p>

以上の整理をもとに、今年度の「防災×スポーツ」のワークショップ内容として、①風船リフティング×防災知識、②手繋ぎドリブル×防災クイズ、③ウォーキングサッカー⁴の実施を決めた。それぞれのアクティビティは、表2のように4つの特性を習得することを目的に組み合わせた。

⁴ 高齢になってもサッカーを楽しむために作られたイングランド発祥のスポーツ。走らない、ボディコンタクト禁止、1.8m以上の高さにボールを蹴り上げないなどのルールに従い、フットサルコートサイズで行うサッカー。老若男女問わず楽しめる。

表 2 アクティビティメニューと習得特性

アクティビティ	内容	判断力・行動力	集団意識	他者配慮	コミュニケーション
①風船リフティン グ×防災知識	グループで手を繋いで輪になり、風船を落とさないように蹴り上げながら前進する。防災備品をひとつずつ言いながら進む。手を繋ぐことで行動の制限ができ他者配慮が必要になる	風船の不安定な動きに合わせ、多方向（前向き、横向き、後ろ向き）へのキックを判断する	風船を地面に落とさないように協力しながら進む。防災備品を思い出せる人が積極的に発言する	グループ内での各人のキック力の強弱に対応し行動する	風船保持者から他の仲間が風船を受け取るために声掛けを行う
②手繋ぎドリブル ×防災クイズ	グループで手を繋いで輪になり、ボールを囲んで蹴りながら目標物（防災クイズの答え（○か×）として選択したマーカー）を回ってスタート地点に戻ってくる。クイズの答え（図 8）は終了後に配布し持ち帰ってもらう	前進するために、多方向（前向き、横向き、後ろ向き）へのキックを判断する	クイズの答えをグループで考え、決断する	グループ内での各人のキック力の強弱に対応し行動する	ボール保持者から他の仲間がボールを受け取るために声掛けを行う
③ウォーキングサッカー	走ったりボールを頭よりも高く蹴ったりしてはいけないサッカー。走らないことでスピードが通常のサッカーよりも遅くなり、より多くのコミュニケーションを取ることができる。他者と協力してゴール目指す	ボールの動きに合わせた判断と行動を行う	得点制に合わせ、グループごとに戦略会議を行う	他者の身体能力を考慮しながら自分の行動を調整する	ボールをパスする際やパスを受け取る際に声掛けを行う

3. 令和元年度箕子防災訓練「防災×スポーツ」ワークショップ

2019年11月初旬、福岡市中央区役所と箕子自治連合会の協力のもと、箕子地域の防災訓練の一環として「防災×スポーツ」ワークショップを実施した。

2014年に閉校した旧福岡市立箕子小学校のグラウンドと校舎を使用した当日の訓練内容は、「防災×スポーツ」のほかに、「段ボールベッド作成体験」、「防災倉庫資機材展示」、「非常持ち出し品を考えるコーナー」、「防災クイズ」、「おいしい非常食試食体験」、「段ボールスリッパ展示」、「分団消防車放水体験」、「子ども消防服試着体験」であった。会場では、各訓練への参加を促す目的で、スタンプラリーが開催され、参加者たちは、受付で配布されるスタンプラリーの台紙（図3、4）を手に各ブースを訪れ、訓練に参加した。



図3 防災訓練主催者・協力者作成のスタンプラリー台紙（表面）

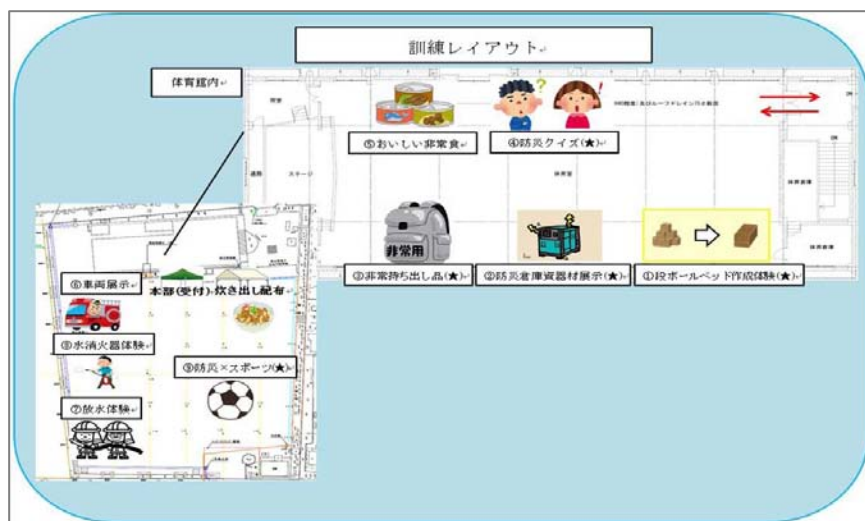


図4 防災訓練主催者・協力者作成のスタンプラリー台紙（裏面）

また、「防災×スポーツ」のアクティビティ参加者だけでなく、アクティビティを見学する方たちにも「防災×スポーツ」の概念を周知するため、その概念の一部を紹介する A5 サイズのチラシを作成した（図 5）。災害時に活用できるスポーツコミュニティの 4 つの特性のイラストを描いたチラシを「防災×スポーツ」のブースに設置し、訪れた訓練参加者たちへ配布した。



図 5 防災訓練で配布した「防災×スポーツ」の紹介チラシ

防災訓練「防災×スポーツ」ワークショップ概要

■ 日時・場所

- 日時：2019年11月10日（日）10時～12時
- 場所：令和元年度箕子防災訓練（旧福岡市立箕子小学校グラウンド）

■ 対象者

- 「令和元年度箕子防災訓練」参加者（箕子校区を中心とする福岡市民など）

■ 背景

- 阪神大震災後の調査では、地震によって倒壊した建物から救出され約8割の人が家族や近所の住民が救出したということが明らかになっている。
- 自治会や町内会等の地域コミュニティでは、加入率の低下、活動への参加度の低さ、防災訓練実施率の低さ、自治会役員の高年齢化等、いくつもの要因が重なり、防災主体としての能力の低下が懸念される。
- 総務省による防災教育のねらいが「備え」「繋がり」「知識」の三つに要約されるように、スポーツコミュニティがもともと持つ体力的な「備え」「繋がり」は防災に大きく寄与しうる。
- スポーツコミュニティは、本来有する能力を活かすと同時に、平時からの備えと非常時の機動力の両方を満たす地域の防災コミュニティとして活躍することが期待できる。

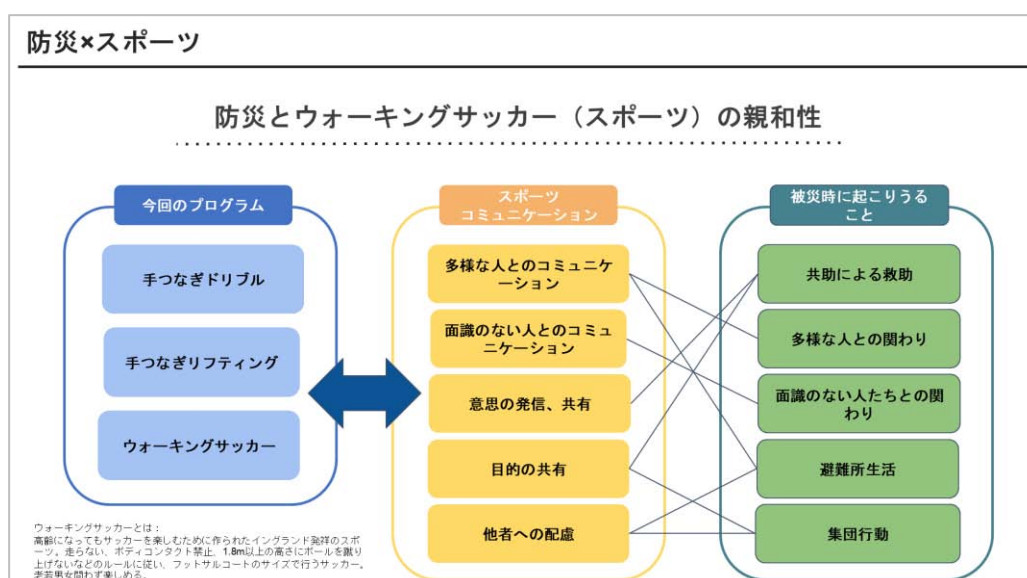


図6 「防災と×スポーツ」の趣旨を説明するスライド

■ 目的

- スポーツにおけるコミュニケーションを通じて、初対面同士のコミュニケーションのハードルを下げ、地域住民間のコミュニケーションを円滑にする。
- スポーツプログラムを通じ他者配慮の精神を醸成し共助へつなげていく。
- 身体的な活動と防災クイズなどを合わせることで、より楽しく、ポジティブに防災意識を醸成する。

■ 内容

① 風船リフティング×防災知識

グループで手を繋いで輪になり、風船を足で蹴りながら地面に落とさないように、また防災備品をひとつずつ言いながら進む。手を繋ぐことで行動の制限ができ、他者を配慮しながら行うアクティビティである。

② 手繋ぎドリブル×防災クイズ

グループで手を繋いで、ボールを囲み、蹴りながら目標物（防災クイズの答えとして選択したマーカー）を回ってスタート地点に戻ってくる。運動と思考を組み合わせたアクティビティ。クイズの答え（図8）は終了後に配布し持ち帰ってもらう。

③ ウォーキングサッカー

走ったりボールを頭よりも高く蹴ったりしてはいけないサッカー。走らないことでスピードが通常のサッカーよりも遅くなり、より多くのコミュニケーションを取ることが可能となる。他者と協力してゴール目指す。

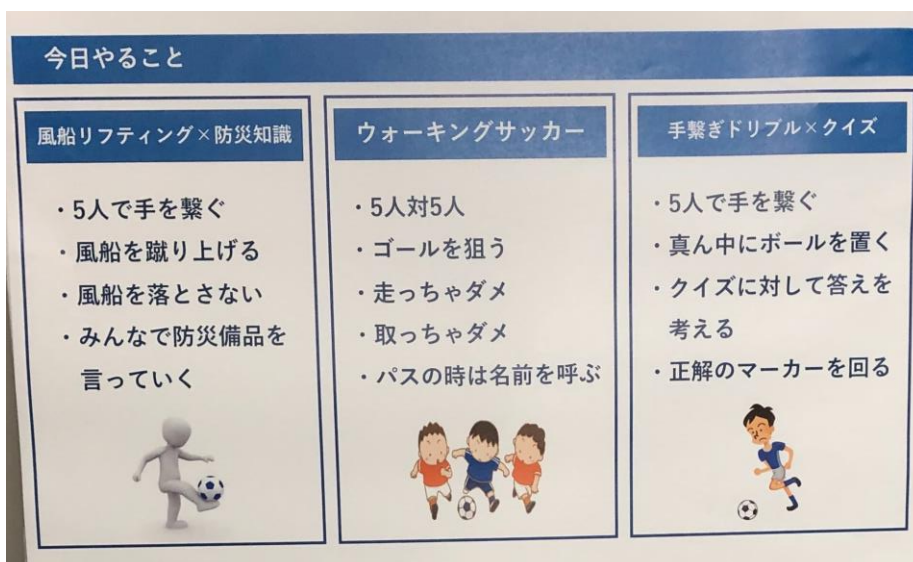


図7 簀子防災訓練「防災×スポーツ」参加者説明用プログラムのパネル

「防災×スポーツ」で行ったクイズの答え
(令和元年度青少年防災訓練内)

Q1 阪神・淡路大震災では、がれきの下から救出された人の「3割」が「近所の人」から助け出された。
 答え (○)
 7割弱が自力や家族などの「自助」、3割が隣人等の「共助」により救出されており、「公助」である救助隊による救出は数%に過ぎなかったという調査結果があります。普段の近所づきあいから「共助」の力を高めよう。
http://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/pdf/H30_dai1bu1.pdf

Q2 火事の時、煙は空気より軽くなり上に広がる。
 答え (○)
 煙は熱せられて空気より軽くなり天井に向かい、その後横に広がります。火元から離れると冷えて重くなり境界をふさぎます。火事の時、本当に怖いのは煙です。濡れたハンカチで口と鼻をおい、体を低くして壁伝いに逃げましょう。
<https://www.city.miki.lg.jp/sodoki/49/3645.html>

Q3 台風などによって、水害や土砂災害などの災害が発生するおそれがあるとき、「警戒レベル4」で全員が避難する。
 答え (○)
 「警戒レベル3」で高齢者等は避難、「警戒レベル4」で全員が避難です。対象地域の方は全員が速やかに避難しましょう。
<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201906/2.html>

Q4 福岡市の中心部を縦断する「警固断層」の南東部で地震が起こると、マグニチュード5.5程度の地震が発生すると推定される。
 答え (×)
 マグニチュード7.2程度の地震が発生すると推定され、その際には断層近くの地上で、2m程度の左横ずれが生じる可能性があります。
https://www.jishin.go.jp/regional_seismicity/en_katsudano/t108_kega/

Q5 大雨などから避難する時は、ヘルメットで頭を保護し、長靴を履いて逃げる。
 答え (×)
 大雨の時は、長靴は厳禁です。長靴の高さより水位があると、水が入ってきて重くなります。ひもで締められる運動靴がおすすめです。
<https://www.bousai.pref.fukuoka.jp/bousaihandbook/>

Q6 火事が起きて火を消す時は消火器が役に立つが、一般的な消火器の放射時間は約10分である。
 答え (×)
 一般的な消火器の放射時間は約15秒です。日頃から消火器の使用法を確認することが大切です。
<http://tsk.jp/itimg/files/handbook.pdf>

Q7 外出中大地震が起きた時、ガソリンスタンドが近くに、ガソリンスタンドに避難してよいか？
 答え (○)
 ガソリンスタンドは耐火性に優れており、阪神・淡路大震災の時もガソリンスタンドで火災の広がりが止まったなどの事例があります。
<http://www.bousai.go.jp/kyuika/keigen/terikumi/uh22002.html>



 国際防災×スポーツ実行委員会 <https://www.facebook.com/bosaissports>
 八角(福岡地域戦略推進協議会)、菊澤・山田(公益財団法人福岡アジア都市研究所)

図 8 アクティビティ②で使用した防災に関連するクイズおよび終了後に配布した答え

■ 活動報告

「防災×スポーツ」ワークショップの防災訓練での実施は初めての試みであった。内容の改善の余地は十分あるが、防災訓練参加率への貢献や、楽しみながら災害について学び、備えるという取り組みとして、今後も実施を続けていく価値があることが、参加者の反応からわかった。アクティビティの参加者の年齢が低く、防災クイズへの理解が難しいグループの回もあったことは今後の課題である。多様な人が入り混じる地域コミュニティにおいて、コミュニケーションの促進と、スポーツという身体活動の中での防災知識の取得が可能であることを示す方法を模索する必要がある。

また、「防災×スポーツ」は、受付机における風船の装飾も手伝い、子ども向けの訓練という印象を与えてしまった可能性があり、大人たちは見学をするだけで参加をためらう場合が多かった。一方で、子どもが参加を希望した際に親も一緒に参加するように促したことで、親子で参加するケースもあった。子どもをサポートする形で親がアクティビティに参加したことで、親と子の両方の動きがスムーズになった。

■ アクティビティ

- 1セットの実施回数：4回（内容①～③を1セット×4回）
- 参加人数：35名（未就学児6名・小学生20名・中学生2名・大人7名）



写真 防災訓練「防災×スポーツ」ワークショップ

4. 実践における課題と今後の展開

本研究の活動項目の一つである地域コミュニティ関係者らへの聞き取り⁵を通じて、退職後に外出や地域との交流が少なくなった高齢者や、地域との関係性が薄くなりつつある若者、そして地域との交流の仕方が分からない外国人在住者の存在が明らかになった。認知症や体力的な衰えがある高齢者や日本語の理解が十分でない外国人は、災害発生時に支援が必要な「災害時要援護者（災害弱者）」と認識されている⁶。しかしながら、防災訓練を含む地域のイベントを企画する側は、いかにして高齢者、外国人在住者、若者の参加を促すかについて頭を悩ませていることも分かった。

現在各地で実施されている防災訓練では、子育て世代の住民が子どもを連れて参加しやすいように、またそのモチベーションを刺激できるように、消防車の展示や、スタンプラリーと組み合わせた景品の配布、炊き出しの提供など様々な試みが実施されている。

今回、地域住民の防災訓練への参加率を上げるという観点では、スポーツと組み合わせたアクティビティを防災訓練の一環として実施したことは、目新しい訓練内容の追加という点で大いに効果があったといえる。「防災×スポーツ」は、子どもや子育て世代の住民だけでなく、若者や高齢者が、従来とは違った形で防災訓練に参加したり、防災知識を高めたりする機会を創出できることから、様々な地域での展開を期待したい。

また、自治協議会や自治連合会の内部には、「防犯防災部」と「体育部」が設置されており、それぞれが防災関連、スポーツ関連と、別々の企画を担当し活動している。「防災×スポーツ」は、どちらの切り口からでもアプローチできるため、地域住民のイベントへの参加率向上や、イベント内容の活性化に貢献できる可能性がある。

例えばウォーキングサッカーは、新たなスポーツとしての魅力がありつつ、年齢や性別の括りなく一緒に行うことが可能なスポーツである。このことから、コミュニケーション形成に寄与する「防災×スポーツ」アクティビティメニューの一つとして大いに期待できる。また、サッカーは世界中で愛されているスポーツの一つであり、馴染みのある外国人在住者も多いことから、地域の国際化に対応した地域交流の機会創出という点でも適したメニューと言える。

地域の高齢化が進み、近隣住民とのつながりが希薄化するなか、災害に備え、共助の下準備を作るためにも、「防災×スポーツ」ワークショップなどの活動を通じ、住民同士のコミュニケーションの機会が増え、ひいては地域の防災力が向上することを願う。

⁵ 2019年7月5日、民間事業者（地域とのつながり構築に貢献する薬局A社）への聞き取り調査。2019年9月4日、福岡市中央区役所 総務部 地域支援課 防災・安全安心係への聞き取り調査。2019年9月4日、福岡市南区役所 総務部総務課 防災・安全安心係および福岡市南区役所 総務部地域支援課 地域支援係への聞き取り調査。2019年9月9日、「ふくおか共創プロジェクト」共創コネクタへの聞き取り調査。2019年9月25日、福岡市南区A校区 自治協議会会長への聞き取り調査。

⁶ 日本赤十字社「災害時要援護者対策ガイドライン」2006年3月。http://www.jrc.or.jp/vcms_lf/saigaikyugo-3.pdf

謝辞

本研究の実施にあたり、聞き取り調査にご協力いただいた皆様、箕子自治連合会の皆様、防災訓練に参加いただいた皆様に大変お世話になりました。皆様からいただいた貴重なご意見は、本研究の意義を高め、今後の研究および取り組み進展への原動力となりました。ここに感謝の意を表します。

チーム紹介

- 八角剛史 福岡地域戦略推進協議会（Fukuoka D.C.）アソシエイツ
企画・執筆： 2017 シーズンまでJリーガーとして活躍し、引退後は、スポーツが持ちうる多様な可能性を引き出すべく、ストイックに新たな挑戦に東奔西走する。
- 山田美里 （公財）福岡アジア都市研究所 研究スタッフ
情報収集・執筆： 持ち前のコミュニケーション能力とフットワークの良さを生かし、定量的定性的あらゆるデータを収集し、チームの歯車を回す。
- 菊澤育代 （公財）福岡アジア都市研究所 研究主査 博士（芸術工学）
執筆・監修： 環境分野のバックグラウンドを持ちつつ、環境の問題が地域の問題であることから、視野を地域に広げ、多様な地域課題に目を向ける。

防災×スポーツ

Disaster Resilience × Sports

発行 2020年3月

編集・発行 公益財団法人福岡アジア都市研究所（URC）

〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目10-1

Phone 092-733-5686

Fax 092-733-5680

E-mail info@urc.or.jp

URL <http://www.urc.or.jp>

Fukuoka Asian Urban Research Center

1-10-1, Tenjin, Chuo-ku, Fukuoka, 810-0001, Japan

Phone +81 92-733-5686

Fax +81 92-733-5680

